

# 天皇制の心理的基盤としての日本人の心理について

塹 江 清 志・早 川 清 一

本論文においては、「天皇制の基盤としての日本人の心理特性」についての考察がなされた。得られた結論を箇条書きにして列挙すると以下ようになる。

1. 日本人の「統合」を象徴する「天皇」の存在の心理的基盤を説明する和歌森(1970, 1973)の説は否定され、中根(1967)の「タテ社会」の理論による説明が妥当である。

2. 「天皇家」の成立基盤である「祭祀権」も重要な要因である。

キーワード：天皇制，日本人の心理，一体感の心理

## 1. 本論文の目的

本論文の目的は、日本人の心理（民族的精神構造<sup>1)</sup>）としての「一体感の心理」が、「天皇制（天皇を日本国の首長とする政治体制）」を成立せしめる心理的基盤であることを論証することである。

## 2. 和歌森の論文の要約

和歌森<sup>2), 3)</sup>は、「天皇制」が日本人の「社会心理」に基づいて成立するものであることを論じている。

彼の論旨を要約すると、以下ようになる。

1. 「天皇の在り方」の原型は、邪馬台国の女王・卑弥呼にある。
2. 卑弥呼は、天照大神に仕える巫女であった。（後に「日本書紀」においては「天照大神」に同一視されている。<sup>4)</sup>）
3. 「巫女」とは、神と人民の間に位置し、神の神託を人民に伝達し、人民の要望を神に願う役目をする存在である。
4. 神に近く位置する者は、「神性（カリスマ性）」を帯びることになる。（神の子イエス・キリストの場合と同じである。）
5. やがて、時代が経るにつれて、天照大神と卑弥呼とは同一視され、卑弥呼は、天皇家の皇祖神となり、伊勢神宮の主祭神である「皇祖神」・天照大神となった。それ故、彼女の所有する「神性（カリスマ性）」は、天皇に継承されている。（それ故、明治期において、天皇は、「現人神」であった。）
6. 過去の日本の歴史を通して、天皇が必要不可欠の存在として、換言すれば、余人をもっては代え難い存在として要請されるのは、日本国の統一が崩壊の危機にさらされ、日本国の存亡が危機にさらされたときである。

7. そのような状況において、日本国の統一と日本人の団結を調達することが出来たのは「天皇」のみであった。
8. 日本人の社会は、派閥社会である。派閥社会は、その統合において「接点」を必要とする。「接点」になりうる者の条件は、日本人なら誰しも認めざるをえない「権威」の所有者であることである。とすれば、この条件を満たす者は、「神性」を所有する「天皇」においては、他に存在しない。
9. 以上のことから、日本人の心理としての「派閥根性」が天皇制成立・維持の社会心理的基盤である。
10. 更に、「派閥根性」なるものは「歴史的な日本社会の経済的貧しさ」が日本人の「依存的な精神」を育み、それが日本人の「派閥根性」を歴史的に形成してきた。

### 3. 和歌森の論旨への批判

前述の和歌森の論旨に対して著者達は、以下の批判を行うものである。

#### 3.1 日本人の「派閥根性」に対する批判

##### 3.1.1 学術論文における用語としての不適切さ

「派閥根性」という言葉自体、日常生活において常用される言葉であるが、この言葉は「価値」を含んでいる。したがって、学術論文に用いられる言葉として適当ではないと考える。

##### 3.1.2 「タテ社会」という言葉の適切さ

中根<sup>5)</sup>は、「タテ社会の人間関係」において、日本人の社会の特性として「タテ社会」を指摘しているが、「タテ社会」は、その社会構造上必然的に「派閥社会」に成らざるをえない。

更に、中根<sup>5)</sup>は、日本人の社会が何故「タテ社会」になるのかの説明も行っている。この説明の方が、和歌森の「経済的貧困さからの日本人の依存性」による「派閥社会」形成の説明よりも論理的である。心理の問題であるから、心理学的に考察する方が妥当と思われるので心理学の分野での知見を考慮するとき、「経済的貧困さ」が「依存心」を育むという論理は、実証されているとは思えない。

##### 3.1.3 歴史的にみた「日本社会の経済的貧しさ」に対する批判

歴史的に、欧社会との対比の上で日本社会の「経済的貧しさ」を検討するとき、和歌森<sup>2), 3)</sup>の考えは、明らかに誤っていると指摘できる。風土論的に考察すれば、辺境不毛の僻地の西欧の歴史とは、一言で云って、「飢えと寒さ（「寒さ」に必然的に付随するものが「飢え」）」の歴史であり、これに比べて、先進国の中では世界で最も物質的豊かさに恵まれた（「一粒万倍」）歴史を経験したのが日本・日本人である。西欧近代化の挫折の時代（1550 - 1850年）以降の殖民地略奪によって、殖民地の人々の犠牲の上で西欧はやっと豊かになったのである。したがって、民族的精神構造などを議論するときには、その生成因としての歴史的風土論的原因の考察から結論すべきである。官製の資料に基づいての資料至上主義や観念論的・抽象論的・イデオロギーの次元で日本の国の歴史的経済的貧しさを云々するのはあまりにも皮相的である。「経済的貧しさ」が立証できなければ、依存性も成立せず、派閥根性につながらない。それ故、和歌森の論旨は、

前述の論旨の 8. から以後は不適當である。

### 3.2 中根の説明に対する批判

中根<sup>5)</sup>は、「タテ社会」の成立因を、日本人「場」重視の心理で説明し、「場」社会の成立→「直接接触的人間関係」→「タテ社会」の成立という論理で説明している。

これに対して著者達は、塹江<sup>6)</sup>の日本人の「民族的精神構造」としての「一体感の心理」に基づいて、「一体感」→「直接接触的人間関係」→「場」社会の成立→「タテ社会」の成立という説明の方が論理的であると考え、何故ならば、中根<sup>5)</sup>の論理にしたがえば、「場」重視の心理の生成因を改めて説明しなければならなくなるが、その説明は中根<sup>5)</sup>においてはなされていない。

### 3.3 著者達の解釈

以上のことから、著者達の天皇制の心理的基盤に対する解釈は、日本人の「一体感」に基づく「タテ社会」の成立が、日本人の社会において統一が要求されるとき、「接点」を必要とし、その「接点」としては、余人には存在しない「権威」の所有者・天皇が必要となる。それ故、天皇制の存在基盤は、日本人の民族的精神構造としての「一体感の心理」であると解釈する。

## 4. 天皇の「神性（カリスマ性）」について

### 4.1 天皇の「神性（カリスマ性）」

和歌森<sup>2), 3)</sup>においては、天皇の「神性」は、卑弥呼に由来するとされているが、問題は、卑弥呼・巫女が何故、「神性（カリスマ性）」を持ち得たかの理由である。巫女が、神の近く存在するのは当然であり、その結果「神性」を帯びるのも当然である。「巫女」が何故「巫女」たり得るのか、その条件と日本人の「心理」との関係が和歌森<sup>2), 3)</sup>においては明らかにされていない。このことが明らかにされるとき、はじめて天皇制の日本人の心理的基盤が説明されたことになる。

### 4.2 巫女と預言者

ユダヤ民族の歴史を見ると、日本民族にとっての「巫女」に相当するのは、「預言者」である。「巫女」と「預言者」との比較を考察すると以下のようなことが云える。

モーセ（あるいはアブラハム）以来、ユダヤ民族における「預言者」の系譜はノストラダムス（厳密な意味では、彼を「預言者」に入れるのは不適當であるかもしれない。）に至るまで、30余人を数える。このこと自体「預言者」なるものの存在が、ユダヤ民族の精神構造に適合していると云える。実際、世界の歴史を見れば、人類の歴史は、ほぼ「預言者」の「預言」通りに推移して来た。「預言者」とは、あくまでも「神」の言葉を「預かる」者であり、その「神託」は、ユダヤ人の歴史を見ればすぐ分かることであるが、常にと云っていいくらい、民の欲求・願望・希望・要望に反するものである。それ故、預言者は、殆どの場合、民から「狂人」扱いされ迫害されている。少なくとも日本人がなりたがる、また、欲する人気タレントではない。にもかかわらず、ユダヤ民族においては、日本民族のような「巫女」は、存在しない。ということは、ユダヤ民族の精神構造においては、あくまでも「預言者」が適合するということである。

「巫女」は、憑依して、つまり、自らの意識を喪失した状態ということは、無意識のみ機能する状態で、神の「お告げ」を聴く。無意識の状態で感じられるのは、民の「心（無意識）」である。「憑依状態」で民の無意識の心を受感する才能の持ち主が「巫女」になって、民の無意識の心を

「神意」として感受する。それ故、巫女の神託は殆どの場合、異論なく民の受容するところとなる。このようなメカニズムにおいて「巫女」は存在する。とすれば、「巫女」の存在基盤は民の心と「一体」になりうるところに存在する。日本人の民族的精神構造である「一体感の心理」は常に自分の心と他者のそれとが「一体」であることを欲する。それ故、「巫女」なるものの存在を要請するのである。それ故、「巫女」の存在基盤は、日本人の心理にあるといえる。ということは、「天皇」の「神性」は、日本人の民族的精神構造である「一体感」に依拠して成立するものと云える。

## 5. 天皇制と鎮魂の思想

### 5.1 鎮魂の思想

#### 5.1.1 鎮魂の思想

日本人の心理特性の一つとして「鎮魂の思想」が指摘されてきた。「鎮魂の思想」とは、特にこの世に「恨み」を残して死んでいった人の「魂」は丁重に扱われねばならない、即ち「鎮魂」されねばならない、という思想（心理）である。「それ」は、「崇り」の心理に裏づけられているのは周知のところである。

「鎮魂の思想」が具現化された例として、いつも引き合いにだされるのが、出雲大社の壮大さであり、菅原道真の天神である。

#### 5.1.2 鎮魂の思想の基盤としての「一体感の心理」

日本人の心理特性を「甘えの心理」として捉えたのは、土居<sup>7)</sup>であるが、「恨み」の心理の基盤が「甘え」である。「恨み」の心理のメカニズムは、「甘え」→「拒否」→「恨み」であるからである。

それ故、「甘えの心理」は「一体感の心理」を基盤としてはじめて成立するものであると考える。とすれば、鎮魂の思想の成立基盤は「一体感の心理」であると云える。

### 5.2 天皇の祭祀権

#### 5.2.1 祭祀権

古来、「政治」は「政（まつりごと）」、即ち「祭」であった。「祭」とは、死者の「魂」を「鎮撫」することであった。政治家とは、この世の治安を維持する者でありそのためには、死者の「鎮魂」を行う者である。その「鎮魂」を実施する権利を「祭祀権」というが、為政者は「祭祀権」の所有者でなければならない。

#### 5.2.2 天皇の「祭祀権」

古来から日本においては、日本国の成立時より最高の「祭祀権」は天皇家に存在した。天皇家の「祭祀権」の成立のメカニズムは、時系列的に述べると以下の通りである<sup>4)</sup>。

1. 大和の地に最初に樹立された王権は、出雲の物部氏によるものであった。その物部氏の王権を禅譲という形で、王権を獲得した天皇家が、原大和朝廷を樹立した。物部氏の霊を鎮魂して祭ったのが、出雲大社と大和の三輪大社とされている。
2. 伊勢神宮の最初の主祭神は、物部氏の祭る「天照（あまてる）神」であったという。
3. 次に、邪馬台国を継承した（継承のメカニズムについては本論文では触れない）大和朝廷の首

長である天皇（家）は、皇祖神として邪馬台国の首長である卑弥呼の霊を鎮魂して天照大神として伊勢神宮の主祭神（物部氏による「天照」から「天照大神」に変更（内宮）。外宮は豊受大神（邪馬台国での卑弥呼の後継者である台与（とよ））とした。

4. 主に、以上の「鎮魂」の事業を遂行することによって天皇家は成立したのである。故に、天皇家は、日本国の「祭祀権」を獲得して、日本国・大和朝廷の首長となった。

#### 参考文献

1. 木村敏 「人と人之間」 弘文堂 1972年
2. 和歌森太郎 現代心理学シリーズ第2巻「日本人の性格」第2章「天皇制と日本人の心理」 朝倉書店 1970年
3. 和歌森太郎 「天皇制の歴史心理」 弘文堂 1973年
4. 梅澤恵美子 「天皇家は何故続いたか」 KKベストセラーズ 2005年
5. 中根千枝 「タテ社会の人間関係」 講談社 1967年
6. 塹江清志 他 「「一体感」と「断絶観」」 名古屋工業大学紀要 Vol.51, pp.185-190 1998年
7. 土居健郎 「甘えの構造」 弘文堂 1971年